

足底腱膜炎に体外衝撃波疼痛治療 (ESWT) を行った草野球選手の2例

松波総合病院 整形外科・関節外科センター

福田 雅

森 敦幸

田中 薫

岩田崇裕

竹内健太郎

症例1は44歳男性,月1回の早朝野球と毎日のジョギングをしていた。2年前より左足底腱膜炎の診断にて他院で保存療法行われるも改善なく,1年前よりジョギングを中止,半年前から野球も中止した。単純X線画像にて踵骨棘を認め,同部に圧痛も確認された。ESWT(総照射量:1300mJ/mm²,最大出力:レベル7)を行い,VASは70mmから直後には24mmに改善した。1週後に疼痛再燃(VAS=55mm)したが6週後には改善(VAS=15mm)し,ジョギングを再開した。

症例2は55歳の男性,月2回の野球,週3回のジョギングをしていた。1年前から左足底腱膜炎発症し,10ヶ月前からスポーツを中止。症例1同様に踵骨棘が認められている。ESWT(1300mJ/mm²,レベル7)を行い,VASは100mmから直後には12mmに改善した。1週後に疼痛再燃(VAS=59mm)したが8週後には改善(VAS=25mm)し,ウォーキングから再開した。

この2症例について超音波画像とElastgraphyの評価を行った。足底腱膜の厚さを踵骨付着部で計測すると症例1において4.7mm,症例2において5.7mmとChenら¹⁾の報告による 2.9 ± 0.6 mmより肥厚していた。なお症例1においては6週後の時点で4.1mmへ厚さを減じていた。Elastgraphyによる「ひずみ率(足底腱膜/脂肪)」を算出すると,症例1で0.034,症例2で0.178であった。22歳から39歳の健常男性8名(平均年齢32.2歳)のひずみ率を計測したところ0.09であり,症例1でより硬く,症例2でより柔らかいと考えられた。これは腱膜における炎症性浮腫を表している可能性が考えられたが,さらに慎重な検討が今後とも必要と考えている。

【文献】

- 1) Chen H, Ho HM, Ying M, et al. Association between plantar fascia vascularity and morphology and foot dysfunction in individuals with chronic plantar fasciitis. J Orthp Sports Phys Ther 2013;43(10):727-34.